

タカセガイの2次放流手法の確立

近 藤 忍

1. 要 約

栽培漁業センターで種苗生産したタカセガイを、恩納、伊平屋両地区で中間育成し、その後、放流した。生残率は、30%台から10%台へと年々低下している。2次放流したタカセガイについては、潜水調査を行い、放流群と思われるタカセガイを数個体観察した。

2. 目 的

タカセガイの中間育成礁における成育状況及び2次放流後の効果について知見を得ること。

3. 方 法

タカセガイの中間育成及び2次放流。さらに、放流海域において、潜水調査を行い、放流個体の確認に努めた。

4. 結 果

中間育成礁内における成長及び生残率

恩納地区 栽培漁業センターにおいて種苗生産されたタカセガイを恩納村地先に設置されている中間育成礁へ1次放流した。

平成8年度は、平成7年11月10日及び平成8年1月24日に約20万個体（平均殻径6.15mm）を1次放流、平成8年10月24日に取り上げ2次放流した。取り上げ数は約6万個体（平均殻径25.4mm）、生残率27.8%であった。2次放流したもののうち、800個体については赤塗料を殻頂部に付着させ、900個体については、青塗料を殻頂部に付着させ、標識放流した。

平成9年度は、平成9年1月24日に約20万個体（平均殻径5mm）を1次放流、平成9年5月21日の中間生残率は約40%（平均殻径15.3mm）、平成9年10月15日に取り上げ2次放流した。取

り上げ数は、約2.4万個体（平均殻径26mm）、生残率12%であった。

2次放流したもののうち、4,000個体については、青塗料を殻頂部に付着させ2次放流した。

伊平屋地区 栽培漁業センターにおいて種苗生産されたタカセガイを伊平屋村地先に設置されている中間育成礁へ1次放流した。

平成8年度は、平成8年3月26日に約20万個体（平均殻径3.53mm）を1次放流、平成9年2月22日に取り上げ2次放流した。取り上げ数は、約3.5万個体（平均殻径34.57mm）生残率16.8%であった。

平成9年度は、平成9年3月26日に約27万個体（平均殻径4mmおよび7.8mmの2群）を1次放流、平成10年1月27日に取り上げ2次放流した。取り上げ数は、約2.9万個体（平均殻径36mm）生残率10.3%であった。

2次放流後の追跡調査

伊平屋地区において、2次放流を行った海域を、スクーバ潜水器を用い、目視調査を行った。約30分程度の潜水調査において、昨年の放流群と推定される個体（殻径約50mm）が、水深5mから10mの礁斜面で数個体観察された。

また、恩納村、伊平屋村両地区貝類部会の漁業者からの聞き取りによっても、放流周辺海域には2次放流されたと推察されるタカセガイが相当数観察される旨、報告を受けている。

5. 考 察

中間育成礁内の生残率の低下について

恩納、伊平屋両地区に於ける中間育成後の生残率は年々低下している。当初30%程度であった生残率は、平成9年度は、10%台となった。

あくまで推察の域を出ないが、生残率の低下

の原因と考えられることは、中間育成礁内に、
アキガイ科、フジツガイ科のタカセガイを捕
食すると考えられる肉食性貝類が頻繁に見られ
たこと、また、ナガウニ、ニシキウズ等タカセ
ガイと食性が競合する生物が多数観察されたこ
とから、捕食による減耗、育成礁内の珪藻等餌
料の減少等、生残率低下の一因と考えられる。

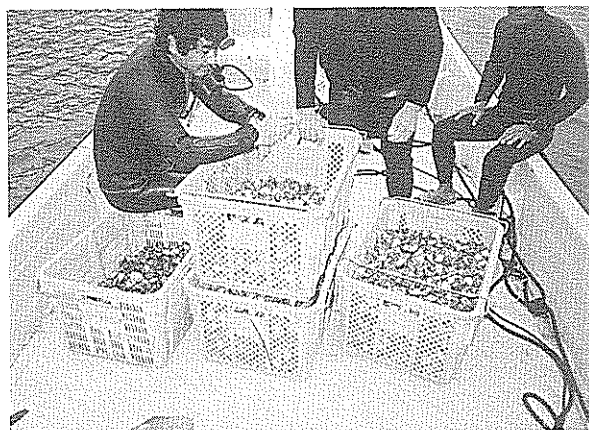
この様な他生物の捕食競合等防止し、生残率
の低下を防ぐために、取り上げ後の育成礁内の
清掃（食害生物、食性が競合する生物の排除）
は、大変重要であると考えられる。

放流効果について

2次放流後の生残率等、放流効果の把握は、
大きな関心事である。毎年標識個体放流を継続
しており、また、潜水調査により頻繁に放流群
と思われるタカセガイが観察されること。また、
漁業者から、2次放流されたものと思われるタ
カセガイが相当数観察される旨、報告等あるこ
とから、放流効果は徐々に現れ始めているもの
と考えられる。今後、定量的な放流効果調査方
法を導入して、さらなる放流効果の把握に努め
たい。



中間育成礁より取り上げたタカセガイ



タカセガイの2次放流 その1



タカセガイ中間育成礁



タカセガイの2次放流 その2